

1. 関東大震災後のオリンピック・ムーブメント

- 1923.10.1 「オリンピック大会参加の宣言」
- 1924. 2.3 クーベルタン宛書簡で、パリ大会参加を表明。

2. 1940年東京大会の招致活動

1) 嘉納と大会招致・大会返上の経緯

- 1930.6 永田秀次郎東京市長、大会招致のための調査を山本忠興（日本学生競技連盟会長）に依頼。
- 1931.10.28 東京市議会、1940年オリンピック大会の招致を決議。
- 1932.7.27-28 IOC総会（ロサンゼルス）に出席し、ラツール会長に東京招致を表明。
- 1932.9.29 岸清一（IOC委員）、天皇にご進講。1940年大会の招致は「厳しい」。
- 1933.3.12 日本、国際連盟を脱退。
 - 6.7-9 IOC総会（ウィーン）に出席。東京大会の組織、競技場、経費について報告。杉村陽太郎（元国際連盟事務局次長）がIOC委員に就任。
 - 6.12 永田秀次郎宛書簡でIOC総会について報告。
- 1934.5.16-19 IOC総会（アテネ）に出席。日本のスポーツ写真を配付し招致活動。副島道正がIOC委員に就任。
 - 12.13. 杉村（駐伊大使）、ムッソリーニと会談。
- 1935.1.16 副島、ムッソリーニとの会談前に卒倒。
 - 2.8 杉村・副島、ムッソリーニからローマ辞退の確約を得る。
 - 1.10. IOC委員宛「東京招致」の懇請状
 - 2.26-3.1 杉村、IOC総会（オスロ）に出席。開催地決定が延期。
- 1936.3. 来日したラツールIOC会長の接待、9日間／3週間。
 - 5.22 ラツール、クーベルタンに書簡で、日本にはスポーツ精神・オリンピック精神が渦巻いており、12回大会の開催地としてふさわしい印象を持ったと伝達。
 - 7.29. クーベルタン、日本へのメッセージ。
 - 7.31. IOC総会（ベルリン）に出席し、最終プレゼン。ヘルシンキとの決選投票直後にスピーチ。
- 1938.3.10-18 IOC総会（カイロ）に出席。1940年東京大会の信任を得る。
 - 5.4. 横浜に向かっていた氷川丸で肺炎により死去。
 - 7.15. 東京大会返上を閣議決定。
- （ ↓ 嘉納のレガシー）-----
- 1952.5. 日本、1960年大会の東京招致の意向を表明。
- 1955. ブランデーIOC会長来日。1964年大会招致とするようアドバイス。
 - 10.10 東京都議会、1964年大会招致を満場一致で決議。
- 1958.5.14-16 IOC総会が東京で開催。
- 1959.5.23-28 IOC総会（ミュンヘン）で1964年大会の東京開催が決定。
- 1964.10.10 東京大会開幕。

2) 嘉納によるオリンピックのビジョン

- a. 近代オリンピック設立の意志は古代オリンピックがギリシャに限っていたのに対し世界のオリンピックにすることにあり、欧州と米国のみのオリンピックではない、東洋でも行わねばならないといふのが最も大きな理由で、しかも日本位熱心に大会に参加してをる国は世界中に少いではないか。『東京朝日新聞』1936.7.25.
- b. 自分は重大な覚悟を持ったのである。オリンピックは当然日本に来ると思われるにも拘らず若し来なければそれは正当な理由が斥けられたといふ事に違ひない。それならば日本から欧州への参加もまた遠距離であるから出場するには及ばないという事になる、その時は日本は更に大きな世界的な大会を開催してもよかろうと思つてゐる。『東京朝日新聞』1936.7.31.
- c. 私が生んだ日本のオリンピック・ムーブメントは遂に実を結ぶことが出来た、(中略)東京で開くとなつた以上あくまで世界に模範を示さねばならない従来のオリンピックは欧米だけで開催されオリンピックの真の意義を発揮出来なかつたが次回の第十二回大会は東京で行ふ事になりこれによって真に世界的なものとなると同時に日本の真の姿を外国に知らせることを得るので二重に愉快である。『読売新聞』1936.8.1 号外
- d. これ(オリンピック)は体育の奨励、運動精神の涵養と相互の親善等の事に裨益するところがあると考えるのであります。／日本も諸外国に大公使を送りまた実業団体が各国に支店や出張所を設けておつて、我が国と諸外国との関係はそういう方面からはあるけれども、しかし国と国との本当の親善関係はそういう事だけでは達せられぬと思うのである。そういう点から考えると、オリンピック大会に参加することは、体育の上ばかりでなく、国民と国民との間の親善がこれによって達せられると思うのであります。「オリンピック大会東京大会招致に至るまでの事情についておよび道德の原則について」『中等教育』第84号、1937.3.

3. IOC 委員たちとの交流からの影響

- a. この四年ごとの大会の目的は、世界各国の選手を集めて競技せしめもつて体育を奨励するという事、および体育の方針を正しくする事というにあるのである。けれどもなお主なる委員の希望として、ここに集合した委員間の交際、ならびに青年者の交際によって、互いに感情を同じうし意志を疎通し、もつて国際間の融和を図るという事も、軽んずべからざる意義となつておるのであつて、英国の同会国際委員某氏のごときは、その熱心なる唱道者である、……少なくとも各国から集つた委員間には、一種の温かい感情を同じうするのであつて、現に余がその後各国を巡視した際のごとき、同会委員として仲間であつた人々を訪問したれば、格別の歓迎と特殊の好意とを与えられた、したがつて何とはなしに親しい情が起り、快い感を有することを経験したのであつた。『教育時論』1013号、1913
- b. 自分はまた国際オリンピック会議に出席してみても、行つたたびごとに唱えられているのは、これは各国の青年がここに来ては国の区別はない、お互いに手を握つて融和し、国際の協調を助ける手段としなければならぬというようなことを諸国の国際委員が唱えておつたことを記憶している。……国際競技が盛んに行われて、それが体育奨励と国際融和の媒介でありたいものだと思つたが……。『中等教育』第52号、1925.6

クーベルタン：オリンピック・コンGRES：新しいオリムピズム、すなわち身体的、知的、道德的そして審美的なすべての教育学を作り出す活動。

Revue Olympique, février 1913

参考文献

1. 『嘉納治五郎大系第8巻：国民体育・国際オリンピック大会』(本の友社、1988年)
2. 『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』筑波大学出版会、2011年、pp.202-220。(真田久「オリンピックの東京への招致」)、および pp.310-330。(和田浩一「IOC委員との交流」)